■佐藤 幸人■

『ポスト民主化期の台湾政治 ―陳水扁政権の8年』

若林 正丈 編

研究双書No.五八二　アジア経済研究所

二〇〇〇年、歓喜に包まれて生まれた陳水扁政権は、何故、二〇〇八年、失望にまみれて退場することになったのか。台湾と東アジアにとって、この八年間は何だったのか。本書は、このような問題意識を共有しながら八人の研究者が取り組んだ陳水扁政権に対する総合的な分析である。編者、若林正丈は日本ばかりでなく世界的にも台湾政治研究をリードしてきたこの分野の第一人者である。

本書は序章と九つの章から構成されている。若林による序章「李登輝が残したコンテキスト―ポスト民主化期の『憲政改革』―」は、本書の分析の基礎となっている。李登輝は新興民主体制の国家性と統治能力の強化という課題に取り組んだが、その成果は中途半端なものに終わった。しかも、対外的にはアメリカの懸念を呼び、しだいに台独阻止という点で米中協調を生み出していった。若林は、国家性の追求およびそれと若林が「七二年体制」と呼ぶ東アジアの国際政治の枠組みとの間の軋みという側面では、李政権と陳政権との間にはむしろ強い連続性があったとみている。

第一章以下では、このような理解を踏まえながら、陳水扁政権期の政治を検討した。第一章から第六章までが内政について議論し、第七章から第九章が外政について論述している。

第一章「陳水扁の政権運営」（小笠原欣幸）は、陳水扁と民進党の「暗転」が何時、どのようにして生じたのか、というこの八年間の最も鍵となる問題に深く切り込んでいる。小笠原は緻密な分析をもとに、新興政治家のヘッジを採らない政治的冒険と、その栄光および挫折を描き出した。

第二章「金権政治の再編と政治腐敗」と第三章「国民党の政権奪回―馬英九とその選挙戦略―」は松本充豊が執筆した。この二章は、松本がこれまで取り組んできた国民党政権と「金」の関係の分析の拡張となっている。第二章では、準備不足のまま政権に就いた陳水扁と民進党の「金」に対するやや拙劣とも言える対応を検討している。第三章では、初めて野党に下った国民党が、動揺と混乱から脱け出し、馬英九を総統候補に擁立し勝利するまでの過程を明らかにした。

第四章「台湾における多文化主義政治と運動」（張茂桂）は、先住民族を含め、エスニシティ上、複数の異なったバウンダリーを持つ社会という側面から、台湾政治を分析している。民主化がこのような社会の上で展開した結果、台湾政治では多文化主義が制度化されることになった。しかしながら、多文化主義が一面において選挙の道具と化していった点も、張は鋭く指摘している。

第五章「ポスト民主化期における租税の政治経済学」（佐藤幸人）は、陳水扁期から馬英九政権初期の租税改革を分析し、財界の主張をカウンターバランスしたのは、野党や社会団体ではなく、財政学者のプロフェッショナリズムであったことを明らかにした。それは同時に、統一か独立かという政党間の主要な争点と、一般的な公共政策をめぐる議論が別次元にあることを示している。

第六章「『選挙上手』はどの政党だったのか？―台湾立法院選挙集票構造の分析―」（若畑省二）は、一九九二年末以降六回の立法院選挙の集合データの分析から、国民党と民進党の集票構造の違いを析出している。台湾の選挙制度は、二〇〇八年から小選挙区比例代表並立制へと変更された。本章は新たな制度の下で、立法院選挙において、イデオロギーに基づく国民党と民進党の二大政党対決の様相が深まると展望している。

第七章「改善の『機会』は存在したか？―中台対立の構造変化―」と第八章「『最良の関係』から『相互不信』へ―米台関係の激変―」は、松田康博の論考である。読者はこの二章から中台、米台そして台湾内部の密接な連動を読み取ることができよう。また、台湾という相対的には小さな存在が、大国である中国やアメリカに対して、その意に反してまでも自己主張していかなければならないという、台湾政治の課題も鮮烈に示されている。

第九章「国際空間の拡大？―『実体』としての国際参加―」（竹内孝之）は、国際政治上、特異な位置にいる台湾の外交政策について、特に国際機関への参加の試みを分析している。陳政権はこの面でもまた、厚い壁に阻まれていたことが示されている。

本書の分析から、新興民主主義として、また中国との複雑な関係において、台湾政治が厳しい制約を課されていたことが浮かび上がってくる。しかしながら、同時に、陳水扁と民進党は部分的には異なる途へ進む可能性もあったことも示されている。本書から、恐らく今後の台湾政治もまた同様の制約と可能性を引き継いでいくことになるだろうという展望が導き出される。

（さとう　ゆきひと／アジア経済研究所新領域研究センター主任研究員）